

(2. 特集 行く・読む・感じる)

2-5. 都市を生きる

吉岡政徳『ゲマインシャフト都市－南太平洋の都市人類学』
(2016年、風響社)

生井 達也

本書は、オセアニアと呼ばれる太平洋地域の島々の中でもメラネシアやポリネシア、すなわち南太平洋の島々における筆者のフィールドワークを基礎にして書かれた民族誌である。本書では、「都市的なもの」と「都市らしさ」および「ヘテロトピー」と「イゾトピー」、「都市」と「農村」などのこれまでの二項対立的な都市研究や社会学的な共同体概念では捉えきれない都市文化とそこに住む人々の有り様を綿密なフィールドワークから明らかにしようと試みられている。

第一章では、「都市とは何か」についてのこれまでの都市社会学や都市人類学などにおける議論を整理しながら、本書の理論的立ち位置を確認している。著者は、都市が異質な他者との共存や交渉を可能にするヘテロトピー的空間であったはずが、異質性の排除や同質・均質的なイゾトピー的空間になってしまっているという近年の都市社会学の議論における明確な対立は、理論上はあり得ても、人々が生きる現実の日常生活の中では、いいかげんなまとまりを作り出す「多配列的思考」によって曖昧化されてしまうと指摘する。

また従来の都市社会学の議論では、ゲゼルシャフト（利益社会）とゲマインシャフト（共同体）という概念が用いられ、都市は常に村落と対比され論じされてきた一方で、これまでの文化人類学的都市研究においては、第三世界の都市が「農耕する都市」であること、つまり村落共同体的な居住地が都市の中に作り出されていることが示されていると著者は述べる。そのような都市では、人々は私的な生活において自分たちのコミュニティの持つ文化背景に従い、労働や仕事にかかわる公的な生活では、伝統的な価値観とは異なった西洋的価値観による「都市のやり方」に従うという人々の姿が見出される。それらを踏まえながら著者は、「ゲマインシャフト都市」というあり方を提案する。第二章から第六章では、その具体例として南太平洋の都市の姿が描き出される。

第二章では、南太平洋の「大都市」であるパプアニューギニアの首都ポートモレスビー、フィジーの首都スヴァ、そしてヴァヌアツ共和国の首都ポートヴィラ、続く第三章では人口一万人程度の独立国家であるツヴァルの都市フチフナが取り上げられ、メラネシア的都市生活のあり方などが論じられる。規模の違いはあるにせよ、これらの都市においては、異なる文化背景を持つ移民の人々が暮らし、庁舎や銀行などのビジネスセンターをもつ「都市らしさ」があふれた空間になっている。その一方で、同じ文化背景を持つもの同士がコミュニティを作り、そ

の内部で、相互扶助的な人間関係を築くことで「村落共同体」に類似した生活を送るなどのゲマインシャフト的關係も営まれている。これらのことから、著者は、南太平洋の都市の人々が、仕事などの公的な場面ではスクール（西洋世界から入ってきた新しいモノ）によって異質な他者と交流し、私的な場面では出身文化圏の習慣、伝統に沿って、他の文化圏、他の島の人々との生活習慣とは異なるやり方で生活を送っているという姿を見出している。

第四章から第六章では、ヴァヌアツの地方都市ルガンヴィルが取り上げられている。特に第五章「都市文化としてのカヴァ・バー」では、村落儀礼の際に飲まれるアルカロイド系の飲料であるカヴァを提供する「カヴァ・バー」を取り上げ、都市の盛り場における人びとの関係や出身島との関係が描き出さる。カヴァ・バーで提供されるカヴァは、村落で飲まれていたカヴァとは異なる作り方、飲み方がなされ「都市的な味」とされる。カヴァ・バーとはそのような「都市らしさ」を示す一つで現象でありながらも、村落の伝統（カスタム）とも結びついているメラネシア的な文化を示すものでもある。さらには、カヴァ・バーが仕事などの公的な領域から共同生活などの私的な領域に戻る前に立ち寄る「中間的な場」（本書：199）であり、匿名性や排他性によるカテゴリー化が行われず、そこで出会う人々の出身島の文化の差異を了解した上で相互に排他的にならないカテゴリー化が行われており、いわばヘテロトピー的な場になっていると著者は指摘する。

第七章では、社会学の議論における公共圏と親密圏という概念を批判的に検討し、これらの概念が南太平洋の都市において成立することが可能なのかについての検証が行われる。著者はまず、ユルゲン・ハーバーマスおよび齋藤純一による公共圏と親密圏の議論を整理した上で、単配列、多配列という二つの概念によってそれらを分析し、理念系としての公共圏、親密圏概念や再創造された親密圏や公共圏も近代的、科学的定義にしたがった排他的な性質を持つことになる」と指摘している。そして、差異が存在するが排他的な性質を極力減少させるような公共圏のあり方、つまり日常知の中に見出せるブリコラージュ的な関係からなる公共圏を作り出すこと、もしくは近代の論理の中から公共圏概念を作り出すことがその解決策になると述べる。しかしながら、前者は前人未到の試みであり、後者のように「都市らしさ」から公共圏を作り出すことは不可能だと著書は断言する。ただし、後者の可能性について、「近代が始まったばかりの状況に公共圏の可能性を見るのであれば、近代の論理と伝統的な論理が入り混じり、ヘテロトピーに満ちた『都市的なもの』とイゾトピーに貫かれた『都市らしさ』が共存する南太平洋に見られるようなゲマインシャフト都市は、再創造された公共圏の成立する場であるかもしれない」（本書：246）と述べ、南太平洋の都市ルガンヴィルが公共圏となり得るのか検討していくが、親密圏の成立の萌芽こそあれ、南太平洋の都市から公共圏を見出すのは難しいと結論づける。

終章となる第八章では、これまで述べてきたゲマインシャフト都市における共同性のあり方が考察されている。筆者は、社会科学が共有してきた「閉じた共同体」と「開かれた公共圏」という二分法を批判したうえで、非同一的な〈断片〉が〈断片〉のまま非一貫的な〈共同空間〉を作り上げることによる「非同一性の共同体」を取り上げ、人類学にとって新たな共同体

のあり方を検討することは重要であると述べる。しかし、本書においては「非同一性によって成立するものだけを共同体として考えない」（本書：262）とする。そして、これまでの共同体と公共圏の概念は放棄することなく、新たな共同体概念に拘泥することなく、両者と相互に絡み合う別の概念の存在を視野に入れながら、現実社会を捉えることが本書の立場であることが示される。

では本書が描き出すゲマインシャフト都市における共同性とはどのようなものなのだろうか。これまで見てきたように、南大洋の都市において、私的領域では、出身島や同じ文化圏同士のゲマインシャフト的共同体が作られ、それらの共同体は互いに排除することなく、非同一性が非同一性として複数存在することが許容されていた。公的領域では、「一貫した」軸として西洋的価値観による「都市のやり方」を導入し、人々はその枠組みの中で仕事関係を維持していく。つまり、共同空間としての都市を、異なる共同体の成員が理解できる形のイゾトピーでまとめあげていると言う事ができる。著者はこのような共同性を、ヘテロトピーとイゾトピーが相互に絡み合う「非同一性の共同性」に基づいた「もう一つ別の共同体」とであると結論付ける。

本書は、これまで二項対立的に議論されてきた都市というものを、南太平洋の都市の人々が「多配列的思考」によってそれらを曖昧にしながら生きる姿を描き出すことで、都市やそこで生まれる共同体のあり方について再考を促すものである。都市化が進む現代において、このように都市を生きる人々への視点は今後も重要であり続ける。著者は、「都市生活がイゾトピーに覆い尽くされてしまうというのは、理論的にあり得ても、現実には起こりにくい」（本書：37）と述べているが、ネオリベリズムによる単配列的な排他性が進行する現代社会においては、多配列的思考で生きることがますます困難になっていくであろう。確かに、本書で取り上げられている南太平洋の都市は、近代西洋都市とも日本の都市とも異なっている。しかし、本書は同時代を生きるものとしての南太平洋の都市の人々から我々に対して多配列的思考を喚起させる呼びかけとして読むことが可能であるし、そう読まれるべきであろう。